



|              |  |
|--------------|--|
| Title        | <文献紹介>ミカエル・デラ・ロッカ著『スピノザにおける表象と心身問題』 Michael Della Rocca : Representation and the Mind-body Problem in Spinoza, Oxford University Press, 1996 |
| Author(s)    | 藤野, 幸彦   |
| Citation     | メタフュシカ. 2011, 42, p. 135-141   |
| Version Type | VoR  |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/23308">https://doi.org/10.18910/23308</a>  |
| rights       |  |
| Note         |  |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 《文献紹介》

ミカエル・デラ・ロッカ著

### 『スピノザにおける表象と心身問題』

Michael Della Rocca: *Representation and the Mind-body Problem in Spinoza*, Oxford University Press, 1996

## 藤野幸彦

本稿が紹介する著作『スピノザにおける表象と心身問題』は、この表題から明らかなようにスピノザ哲学における「表象（representation）」と「心身問題（mind-body problem）」とを扱い、その現代の議論における位置付けを試みている。この際に本書の特色となるのは「心的なものと物理的なものとの因果的・説明的・概念的関係の否定」を「スピノザの形而上学体系の核心を占める原理」と定め、心的なものと物理的なものとの関係を最も徹底的に否定した哲学者としてスピノザを取り上げた、という点であろう。著者であるデラ・ロッカの意図は、スピノザ哲学を単に現代の枠組みの中で捉え直そう、というものではない。

議論の末葉ではなくその根幹からスピノザを理解し、その哲学体系を現代的な視点から論じること。本稿はこうしたデラ・ロッカの意図を汲み取りつつその議論を紹介し、彼が描こうとしたスピノザ哲学の魅力を伝えることをその目的としている。

### 1. スピノザ的原理としての「隔離原則（barrier）」

本稿を始めるに当たっては、まずデラ・ロッカがスピノザ哲学の核心と呼んだ原理を紹介せねばならない。早速彼の議論を見ていくことにしよう。

『エチカ』第一部定理10証明において、スピノザは属性がそれ自身によって考えられねばならない、と述べる。デラ・ロッカの出発点は、この「自身によって考えられる（self-conceived）」という規定にあると言つていいだろう。スピノザにおいて「考えられる（conceived）」ことと「説明される（explained）」ことは互いに等置される概念であり、説明関係と因果関係も同様に等置される。つまりスピノザは概念化（conception）・説明（explanation）・因果関係（causation）の三つをそれぞれ等値関係に置くのであり、ここから「それ自身によって考えられる」ところの属性

は説明関係においても因果関係においても他から独立であることが帰結する。即ち、現代の文脈に照らせば心的なものと物理的なものは概念的に互いに区別される限り、因果的・説明的に全く独立であることになる。デラ・ロッカはこれを「隔離原則」と呼び、「スピノザの形而上学体系の核心を占める」と定めるのである（第一章・第三節）。

ここから出発するスピノザの議論は、表象における「外在主義／内在主義（externalism／internalism）」、心身問題における「還元主義／非還元主義（reductionism／non-reductionism）」、という現代の議論に深く関わるとデラ・ロッカは言う。曰く、スピノザが前述の隔離原則を推定する以上その主張はいずれの議論においても対立の後者、それも極端な意味で後者に属することになるが、それは現代の論者の考えよりも徹底された形で示されている。ならばこの徹底された立場から、心身問題、表現の問題はどのように扱われるのか。現代においてこれらの議論が終結していない以上、我々はスピノザの立場を真摯に受け止め、検討せねばならない——本書における試みとその意義を、デラ・ロッカは改めて提示している。

## 2. スピノザにおける表象——観念内容の相対性と意味の全体論

それでは、表象に関わる議論から見ていこう。スピノザ自身はこの表象（representation）という語を用いていないが、デラ・ロッカは「神の無限な本性から形相的に起こる全てのことは、神の観念から同一秩序・同一連結をもって神のうちに想念的に起こる」（E2P7C）という記述からスピノザの平行論において観念の系列と事物の系列が因果的に同型であり、また各々の観念は自身と平行関係にある事物を表象すると定める。ならばその表象内容は如何にして決定されるのか。これが本書の扱う表象の問題であり、デラ・ロッカは観念の十全性に関するスピノザの議論を通じてこれを論じている。その帰結は大きく二つあり、一つは観念内容の精神に対する相対性、もう一つは表象内容の決定に関する徹底した内在主義である。本節ではこれらを順に見ていく。

さて、デラ・ロッカによればその対象を表象する主体とは対象と平行関係にある各々の観念であり、またそれら観念を有する精神である。この精神に関する規定から議論を見ていこう。

### ・包含テーゼ（containment thesis）

スピノザが述べるところの精神とは、即ち身体の観念である。解釈に当たりデラ・ロッカはこの観念（=精神）を人間身体の諸部分に平行する諸観念、人間身体に起こる諸出来事の観念を含むものとして解釈しており、また人間身体の諸部分が人間身体を組織するようにこれら諸観念が人間精神を組織する、と論じる。そしてさらに、神の無限知性を「全宇宙においては常に運動と静止の同じ割合が保持されている（Ep.32）」ことに平行して組織される、全ての観念から成る個体であるとしている。

この無限知性は「神の精神（God's mind）」とも呼び直されているが、これが全ての観念により組織される個体である以上、人間精神や人間精神を組織する観念は全て神の精神に含まれることになる。これをデラ・ロッカは「包含テーゼ」と呼んでおり、このテーゼからはある一つ

の観念が同時に複数の精神の内に含まれている、という事態が想定されることになる（第二章・第五節）。

この包含テーゼは以下の議論の中で重要な役割を担うものだが、しかしこの見解はスピノザのそれと完全に一致するわけではない。このことを本稿はここで指摘しておかねばならないだろう。

「おののの観念の対象に起こるすべてのことは神の中にその観念が存する、しかしそれは神が無限なる限りにおいてではなく神が（当の観念の原因である）他の個物の観念に変状したと見られる限りにおいてである」（E2P9CD。補足は筆者）とスピノザは述べていた。そして「神は人間精神の本性を構成する限りにおいてではなく、（その原因である）きわめて多くの他の観念に変状した限りにおいて、人間身体の観念を有し、あるいは人間身体を認識する」（E2P19D。補足は筆者）とされることからも明らかなように、スピノザが観念を有すると言う際に語られているのは観念同士の因果・産出関係であり——これはスピノザに極めて特徴的な図式である——デラ・ロッカが解するような包含・所有関係ではない。この点に留意しつつ以下の議論を見て行きたい。

#### ・表象の本質条件（essential requirement）

さて、前述の隔離原則をその原理とするスピノザ哲学においては、各々の属性間の因果的・説明的な関係は認められない。すると観念の内容決定に関わり得るのは同じ思惟属性に属する他の観念のみだということになるだろう。ここからデラ・ロッカは観念による対象の同定について論じ、十全な観念は対象の本質的特性（essential property）によって対象を同定せねばならない、としている。

デラ・ロッカが挙げる「ロジャー・バニスターは一マイルを4分以内に走った最初の人物である」という例を見てみよう。仮に「一マイルを4分以内に走った最初の人物である」という特性によって対象（ロジャー・バニスター）が同定されるとしても、これは対象の本質に拠るものではない。一マイルを4分以内に走った最初の人物である、という特性がロジャー・バニスターのものではない、という事態を我々は想定可能であり、その限りにおいてこの特性はロジャー・バニスターの本質に属するものではないからである。

この非本質的特性によってロジャー・バニスターを同定する為には、実際に彼が一マイルを4分以内に走ったという物理的な事柄が成立していなければならない。しかしこの場合、観念の対象が物理的な事柄に依存して決定されることになる——デラ・ロッカはこれをスピノザの隔離原則を侵犯するものとして指摘するのである。非本質的な特性による対象の同定は、このように隔離原則に反する可能性を常にはらんでしまう。

従って、思惟属性外の事柄を参照することなく対象を同定する為に諸観念は対象の本質的特性によって当の対象を同定せねばならない——スピノザの体系において観念の十全性はこのように扱われる。これが「本質条件」とデラ・ロッカが呼ぶものである（第五章・第四節）。

・表象の因果条件 (causal requirement)

本質条件は、観念が十全である為に本質的な特性によって対象を同定することを要求する。ならば、実際に各々の精神がこの本質的特性を捉える為にはいかなる条件が満たされねばならないのか。デラ・ロッカは『知性改善論』の定議論を基に、「ある精神が事物 X の混乱していない観念を有する為には、その精神は X の有限な原因 C の混乱していない観念を有していなければならない」(p.70) と定式化し、これを「因果条件」と名付けている（第五章・第三節）。精神が観念を有する、ということが包含関係として理解されていることにもう一度注意しておこう。精神がある観念によって対象を十全に表象するか否かは、当の精神がその観念の原因を自身の内に含んでいるか否かによって決定される。こうした図式をデラ・ロッカはスピノザに見ているのである。

・観念内容の精神相対性 (mind-relativity of the content of the idea)

さて、原因の系列は無限に遡ることが可能であるから、この因果条件に関しては「ある精神が事物 X の混乱していない観念を有する為には、その精神は X の全ての有限な原因 C の混乱していない観念を有していなければならない (p.71. 強調は筆者による)」と言われることになる。この強められた因果条件と上述の精神の包含テーマから「観念内容の精神相対性 (mind-relativity of the content of the idea)」という概念をデラ・ロッカは導き出し、これをスピノザ的な立場から生じる帰結の一つとして提示する。

既に見た通り、神の精神とはあらゆる観念から組織される心的個体であるから、この神の精神は自身が有する観念についてその全ての原因の観念を同時に有していることが明らかである。しかし人間精神は有限な心的個体であるが故に、必ずしも自身の表象について因果条件を満たすものではない。即ち、神の精神がある観念により十全に対象を表象する一方、人間精神はこの同じ観念によって対象を非十全に表象しているということがありうる。同一観念の内容が、その関係付けられる精神に応じて異なるという事態が現れるのである。これをデラ・ロッカは心的なものの全体論 (the holism of the mental) の一類型として提示し、クワインとの類縁性を指摘している。

デラ・ロッカによれば、観念の表象内容の十全性は関係づけられる精神に相対性である。そしてこの十全性の程度は、当の観念の原因となる他の観念を、精神がどれだけ有しているかによって決定される。クワインにおいて語の意味が翻訳マニュアルに対し相対的であるのと同様に、スピノザにおいては観念内容が関係付けられる精神に対し相対的なものとなるのである（第四章・第二節）。

・スピノザにおける表象の内在主義

このように、デラ・ロッカによれば意味の全体論とその相対性というクワインに通じる帰結を我々はスピノザ哲学の中に見ることができる。しかしクワインにおいては発話者の置かれた状況に対する顕在的な行為の傾向によって語の意味が得られる、とされる一方、このクワインの立場はスピノザにとって見れば観念内容が他の観念以外のものによって決定されるということであ

り、否定されるべき事柄である。ここに両者の相違を見るとともに、またこの点に関してスピノザは現代のいかなる論者とも共通点を持たない、とデラ・ロッカは論じている。

ここまで見てきたように、スピノザは思惟属性と延長属性の間に隔離原則を置く。そして観念が混乱していない（即ち、表象が十全な形で行われている）場合、精神はその原因となる観念の全てを有し、またこのことによって表象する対象をその本質によって捉えるのであった。ここからデラ・ロッカは、以下のテーゼを導き出す。

「対象の表象に関する妥当なケースの全てにおいて、私が理解する（そして適切な形で私の思惟の中に含まれている）概念は、自身のみによって私の思惟における特殊な対象を決定するに十分である。」(p.104)

即ち表象内容の決定、観念内容の決定に際し、混乱していない観念はその決定から一切の外的要素を排除する。スピノザにおける徹底した内在主義、とデラ・ロッカが論じる根拠をここに見ることが出来るだろう（第五章・第五節）。

### 3. スピノザにおける心身問題——因果的文脈の不透明性と非法則的一元論

議論を移し、「心身問題」に関するそれを見て行きたい。「精神と身体とは同一の個体であってそれがある時は思惟の属性のもとで、ある時は延長の属性のもとで考えられる」とスピノザが述べたことは周知の事実であるが、ここで言われるような心身の同一性をいかに理解するべきか、という点からデラ・ロッカは自説を展開して見せている。結論として得られるのは、スピノザが因果的文脈における指示の不透明性を自身の立場として措定していること、そしてこの同一性の基礎にやはり隔離原則が置かれていること、この二点である。

#### ・因果的文脈における指示の不透明性

デラ・ロッカの議論は、スピノザにおける心身の同一性に対するドゥラハンティとベネットの批判を紹介し、それに応答することから始められている。両者の論拠はほぼ同様のものとして扱われているので、ここではドゥラハンティのそれを確認しておこう。彼によれば、スピノザ的心身の同一性が成り立つとすれば、以下の論証もまた成り立つことになる。

- 1) 延長様態 A は延長様態 B の原因である。
- 2) 延長様態 A は思惟様態 1 と同一である
- 3) 従って、思惟様態 1 は延長様態 B の原因である。

スピノザが延長様態と思惟様態との間に因果関係を認めないことは明らかである。従ってこの結論は誤りであり、思惟様態と延長様態は同一ではない——このようにドゥラハンティは論じている。しかしこれは、因果的文脈における指示の透明性を前提とした議論ではないか。デラ・ロッ

カが指摘する通り「全ての属性の様態は、みずからがその様態となっている属性のもとで神が考察されるかぎりにおいてのみ、神を原因とする」のであり、「他の属性のもとで考察されるかぎりの神を原因としない」(E2p6) とスピノザは述べている。ならば、仮に延長様態 A と思惟様態 1 が同一であったとしても、この同一の事物が延長様態 B の原因となるのは延長属性において延長様態 A として考えられた場合のみであって、思惟属性 1 として考えられた場合には延長様態 B の原因と言われ得ない。

スピノザの体系は因果的な文脈に関する指示の不透明性を主張として含んでおり、ドゥラハンティの批判は当たらない。また従ってスピノザにおける心身の同一性は否定されない——これがデラ・ロッカの主張である（第七章・第二節）。

#### ・同一性の理解可能性と指示の不透明性

このように見れば、スピノザが提示した心身の同一性に関する議論は因果的な文脈の不透明性に立脚していることになる。しかし現代の議論において因果的な文脈は透明なものとされることが多く、またスピノザはこの不透明性に関して十分な正当化を行っていない点をデラ・ロッカは指摘している。論証を遡るならば因果的文脈に関するスピノザの議論は「異なった属性を有する二つの実体は相互に共通点を有しない」(E1P2)、また「相互に共通点を有しない事物は、その一が他の原因たることができない」(E1P3) という『エチカ』第一部の二つの定理に端を発するものと言えようが、その証明の基礎となるのは定理、あるいは公理として挙げられる事柄でありそれ以上の根拠を持たない。その時に我々は因果的文脈の指示に関する不透明性を、現実のものとして受け容れられるだろうか。

この問題に対し、デラ・ロッカは心身の同一性は理解可能な（intelligible）事柄である、という論点から応答を試みている。因果的な文脈の不透明性が心身の同一性を保証するのではなく、後者が可能であるからこそ前者もまた可能な主張となる。そしてこの理解可能性の基礎として、ここにも例の「隔離原則」が提示されるのである。

スピノザの体系において見出される隔離原則は、思惟属性と延長属性の間には一切の因果関係が成立しないということを含んでいる。だがこの隔離原則は因果関係に関わりはしても、当の同一性について語るものではない。「ある様態が延長しているという事実は、それ自体として当の様態が思惟様態と同一であることを排除するものではない (p.148)」のであり、従って心身の同一性は可能な事柄である。

そしてこれと共に隔離原則が両属性間の因果的な関係を否定するなら、因果的な文脈は不透明でなければならないだろう。このようにして隔離原則は心身の同一性を理解可能なものとし、また因果的文脈の不透明性にその根拠を与えるのである。（第八章・第二節）

#### ・スピノザとディヴィドソン

説明関係において心的な領域と物理的な領域を厳密に区別しながら、しかしそれにも関わらず心的な個物と物理的な個物が同一であることを排除せず、むしろこれを導出し得るような体系

——このようにデラ・ロッカはスピノザを理解し、ディヴィドソンの非法則的一元論に重なるものとして位置付ける。これは即ち、心的な事柄の物理的な事柄に対する「非還元主義（non-reductionism）」という主張の中にスピノザを置くものである。また両者は心的な事柄の全体論を採用している（スピノザの場合はそのように思われる）点でも一致することをデラ・ロッカは指摘している。

無論、両者の立場は完全に一致する訳ではない。スピノザが思惟属性と延長属性との間に一切の因果関係・説明関係を認めないことに対し、ディヴィドソンは厳密な心理—物理法則の存在を否定しながらもラフな心理—物理法則を認める点はその顕著な例であろう。スピノザが厳密・ラフという法則の区別自体をそもそもおこなっていないにせよ、ディヴィドソンの「隔離原則」はスピノザに比べ弱められたものだとデラ・ロッカは言う。また、ディヴィドソンは心的な領域において厳密な法則が存在する、ということを認めることも確かである。

加えて、心的な事柄の全体論と隔離原則の関係が両者において逆になる点をデラ・ロッカは指摘している。スピノザの場合この全体論は、隔離原則によって要請される表象の本質条件、また因果条件から帰結するのに対し、ディヴィドソンにおいては心的な事柄の全体論が前提の位置を占め、ここから心的な領域と物理的な領域の間に説明関係が成立しないことが導かれるのである。

しかし、このように異なる基礎を持ちながらも、結論となるテーゼが共有されている点はやはり興味深い。特に心的な事物と物理的な事物の同一性、また事物が心的であること・物理的であることはその記述に対して（スピノザの場合は表現される属性に対して）相対的である、という主張に見られる一致点はこれらの相違に増して注目されるべきものがあろう。「ディヴィドンとスピノザの間にある重要な形而上学的差異とは、この差異と同様に重要な類似性と密接に絡み合った、そうした形而上学的差異である」（p.156）とデラ・ロッカは結論付けているが、この関係はこれからも検討すべきものである（第八章・第四節）。

以上が、本書の概略である。スピノザの根底に思惟属性と延長属性の隔離原則を措定し、その帰結を現代の文脈に位置付けるという点において本書は一貫した視点のもとに書かれており、またこれを冒頭に見たデラ・ロッカの意図を達成する為の手段を見るなら、デラ・ロッカはその意図を十分に果たしていると言えるのではなかろうか。デラ・ロッカが措定する隔離原則は、スピノザを現代のどの論者にも増してラディカルな哲学者として鮮やかに描き出している。

表象内容の精神に対する相対性・心的な事柄の全体論・因果的文脈における指示の不透明性・心的な事柄の非還元主義——本稿が辿ってきた議論は、スピノザ哲学が現代の議論においてなお息衝いていることを示しているのである。

（ふじのゆきひこ 哲学哲学史・博士後期課程）